

第7回 インフラメンテナンス大賞〈厚生労働省〉特別賞（メンテナンスを支える活動部門）受賞

「インフラを地域で守る」社会の実現へ 高専生を対象としたインフラマネジメント テクノロジーコンテスト

インフラマネジメントテクノロジーコンテスト実行委員会 PR部会長 おくだ さきこ
(一般社団法人 Water-n 代表理事) 奥田 早希子



首相官邸で行われたインフラメンテナンス大賞授賞式に、インフラテクコンの「正装」である黄色いTシャツで乗り込みました(左から2人目が筆者)。

1. はじめに

インフラが抱えるさまざまな課題を解決するための取り組みや技術のアイデアを競う、高等専門学校生（以下、「高専生」という）を対象としたコンテスト「インフラマネジメントテクノロジーコンテスト」（以下、「インフラテクコン」という）が、このほど2023年度、第7回「インフラメンテナンス大賞」の厚生労働省特別賞を受賞しました。特別賞は、大臣賞に準ずる取り組み・技術開

発に授与される荣誉ある賞で、実行委員会一同大変うれしく、そして誇りに感じております。これまで支援してくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。

本稿では、そのインフラテクコンの概要を紹介します。

2. わたしたちが目指すところ

これまでの日本には、発展という全国共通の目標が存在しました。そして、インフラを含め、発

展を実現するための全国共通の手段が存在しました。しかし、成熟期を越えた今、課題やニーズは地域ごとに多様化し、まちづくりの目標や手段は全国共通のものではなくなりました。

インフラはこれまで、全国に共通するまちづくりの手段の一つでしたが、今後は地域ごとに求められる新たな価値やサービスを創造・提供するとともに、地域共創・協働、地域連携を推進するハブ的な役割も期待されます。

しかし、少子高齢化や人口減少、財政難などによって、インフラの維持は難しくなっています。特に地方部では、都市圏への一極集中の影響もあって、生産人口・担い手の減少は深刻で、地方経済を支え、インフラを守る地元企業の廃業も懸念されます。

そうした中、高等専門学校（以下、「高専」という）は地域に根差した学びの場であり、そこで学ぶ高専生はこれからの地域を支える人材として、また地域関係者間のコミュニケーターとし

て、キーパーソンになると考えています。

インフラテクコンは、高専生が地域課題に気づき、インフラの新たな役割を考え、その過程で企業や地域行政とつながる機会を提供することで、社会情勢の変化やニーズ、課題に対応できる人材の育成と、「インフラを地域で守る」社会の実現、地域活性化を目指しています。

参加状況は、2020年度（30チーム、17校）、2021年度（17チーム、15校）、2022年度（19チーム、13校）、2023年度（31チーム、20校）となっています。高専は、国公私立を含めて全国に58校あります。まずは、高専のある全都道府県から参加してもらえ、都道府県コンプリートを目指しています。東北地方、九州地方にまだ参加していない地域が多いので、本稿をご覧の高専関係者の方、ぜひご参加ください。高専に知り合いがいる方、ぜひ情報拡散をお願いします（図-1）。なお、インフラテクコンのコンセプトなどは、表-1をご参照ください。



図-1 参加チームの推移
 (青色が濃いほど出場回数が多い。グレーは不参加。黒枠はグランプリ受賞校あり。
 太字は参加したことがある高専、数字は参加した回)

表-1 インフラテクコンの概要

イベント名	インフラマネジメントテクノロジーコンテスト
スローガン	まちを守れ。未来を創れ。
キャッチコピー	繁栄か、廃退か 街の未来は君たちの「技術」と「アイデア」に託された 高専生 挑戦せよ！
テーマ	自由 ※テーマ例として広報・合意形成・住民参加・省力化/合理化技術・代替サービス・仕組み等
対象インフラ	公共インフラ（ネットワーク系、ハコモノ系）すべて ※鉄道、橋梁、道路、電気、ガス、上下水道、通信、庁舎、学校、文化施設、空港、港湾、清掃工場など
解決シース	都市デザイン、土木・建築、AI・IT、機械・ロボテックス、電気・電子、情報、応用科学、化学・生物・環境など
コンセプト	学びを活かして社会課題を解決するワクワク感を体験する
狙い・目的	・学校だけでは身につけにくい「課題発見力」を養う ・学校だけでは学びにくい「地域・まち」と「インフラ」の関係性を知る ・インフラマネジメントへの当事者意識を醸成する ・インフラマネジメントを担うさまざまな企業を知る
ターゲット	全国 58 校の高等専門学校生

3. シームレスな組織が運営しています

筆者は下水道インフラを中心に、官民連携などを得意テーマとする記者・編集者として活動するほか、Web ジャーナル「Mizu Design」運用、学生向け水のCSR誌「Water-n」発行、セミナー事業運営のほか、下水道広報に取り組む団体で活動しています。

そうした中で、下水道業界関係者は、下水道インフラを生活者に理解してほしい、と切に望んでいると感じていました。「下水道を理解しろ」と押し付けられるのは、一人の生活者としてはうっとうしい限りではありますが、逆に一人の生活者として、下水道に限らずさまざまなインフラのマネジメントや行政運営に少しでも関与していくべきだ、とも感じていました。そして、生活者と業界や行政の間にある溝を埋めるべく、活動してきたつもりです。

そんなある日、インフラマネジメントテクノロジーコンテスト実行委員会（以下、「実行委員会」という）の副委員長である岩佐さん（アイセイ株式会社代表取締役）に、「インフラテクコンとい

う、高専向けのコンテストを立ち上げる。については、企画書の日本語を読みやすく添削してほしい」と頼まれ、それくらいなら、と快諾したところ、「今度、実行委員会をやるので参加しませんか」と誘われました。人脈形成になるならこれ幸いと参加したところ、「PR 部会長やってね」と言われ、気付いたらどっぷりはまって、現在に至ります。

きっかけはこんな感じではありましたが、生活者と業界・行政の溝を埋めることにつながる重要な取り組みであることは直感しました。そして、その後のインフラテクコンでの活動を通して、溝があるのは下水道だけではなく、さまざまなインフラに共通した課題であることが分かりました。

「知ってほしい」、「就職する人が増えてほしい」、「魅力ある職業として認識してほしい」。どのインフラ業界の人も、異口同音に同じことを言います。この課題感を共有できているからでしょう。実行委員会は、さまざまなインフラの業界の方々に構成されていますが、自分の業界だけにメリットを誘導するような人は、誰一人いません。世の中では業界の縦割りが弊害になるケースは少なくありませんが、実行委員会は業界シームレスな組織運営ができています。



写真-1 運営に欠かせない大学生サークル「Doboku Lab.」のメンバー（2022年度交流会にて）

また、企画側である実行委員会と、参加側である高専の教員、学生との間もシームレスです。高専の教員に実行委員会のメンバーに加わってもらっていることはもちろんですが、インフラテクコンに挑戦した高専生が卒業して社会人になってから、実行委員会に参加してくれることもあります。

更に言うと、大学生を中心とする学生サークル「Doboku Lab.」のメンバーたちも実行委員会や運営に参加してくれていますので（写真-1）、年代シームレスでもあります。

更にさらに言うと、協賛企業でありつつ企画側（実行委員会）にも参加してくれている方もいます。

業界、企画側・参加側、年代、協賛側・企画側という四つのシームレスな組織運営ができていますからでしょうか。実行委員会コアメンバーの会議では、いつも前のめりで新しい企画や取り組みのアイデアが出てきます。「そんなことやったら大変だよ～」と内心思うこともありますが（時々声に漏れたりしますが、それが許される心理的安全性がある組織です）、それでも何とかやってみる。だから、たとえ0.1歩という超ベビーステップであっても、少しずつ前に進むことができる。インフラテクコンを通して自分こそが成長させてもらっているんだと実感する日々です。

なお、たくさんの関係者が年に1回、交流会というイベントで一堂に会し、意見交換を行います（写真-2）。その場にはたくさんの笑顔があふれています。特に若者たちの笑顔を見ていると、日本の未来は大丈夫だと思えてたくましい限りです（写真-3）。でも、まだまだ負けないぞ、とも思います。

インフラに関する課題を解決する道筋は一つではないでしょう。その中で、インフラテクコンが太く、確かな道になれるように、これからもベビーステップを重ねていきます。



写真-2 いつもたくさんの笑顔があふれる交流会（2023年度授賞式にて）



写真-3 インフラテクコン2023で準グランプリに輝いたチーム「永遠の17ちゃん」（徳山高専）のメンバーと、司会を務めた土木漫才師「元気丸」（2023年度交流会にて）

4. 「正装」で臨んだインフラメンテナンス大賞の授賞式

冒頭で触れたように、インフラテクコンは2023年度に第7回「インフラメンテナンス大賞」の厚生労働省特別賞を受賞しました。特別賞は、大臣賞に準ずる取り組み・技術開発に授与されるものです。その榮譽もさることながら、2024年1月18日には授賞式がなんと首相官邸で開催され、今回の受賞の重みをひしひしと感じています。

余談ですが、首相官邸での授賞式には、筆者を含む実行委員会のコアメンバー4人で行ってきました。その少し前から、私たちのもっばらの話題は「何を着ていく？」でした。インフラテクコンは黄色をイメージカラーにしており、展示会等のイベントでは、おそろいの黄色いTシャツに、年度ごとに作成している直径15cmもある丸い缶バッジを付けるのが、実行委員の正装となっています。授賞式の時点で缶バッジは四つもあったので、全て付けるとTシャツの前面がほぼ缶バッジになってしまいます。

果たして、首相官邸に私たちの正装（はたから見れば単なる黄色いTシャツ。つまり、一般的には正装ではない）で臨むか否か。「一応、持っていこう。着るかどうかは現場判断」ということになり、前日の夜にTシャツにアイロンをかけ丁寧に畳んで、缶バッジと一緒に袋に入れて準備しました。

そして当日。周りは紺、黒、グレーのスーツ姿ばかり。ひるむ岩佐さん！それを尻目に、さっさと「正装」になる事務局の岡野さん（アイセイ株式会社）、渡辺さん（株式会社ガイアート）と筆者。そして、意を決して岩佐さんも「正装」になり、授賞式に臨みました（写真-4）。

かなり目立っていた（浮いていた!?) かもしれませんが、それがインフラテクコンです。そうじゃないとインフラテクコンじゃない。だからイ



写真-4 インフラテクコンの「正装」である黄色いTシャツで臨んだ、首相官邸でのインフラメンテナンス大賞授賞式
（右から、実行委員会の渡辺さん、岩佐さん、（中央はインフラメンテナンス大賞選考委員会の家田仁委員長）、岡野さん、筆者）

ンフラテクコンが賞をいただいたんだ、と考えています。

5. インフラテクコンに参加しませんか

あなたも、インフラテクコンに参加しませんか。参加方法はいくつかあります。まずは企画側（実行委員会メンバー）として参加する方法、ほかにも協賛企業として参加（支援）いただく方法もあります。関心がありましたら、事務局（info@infratechcon.com）までお問い合わせください。

個人的に、高専生やインフラテクコンを応援したいと思われる方は、ぜひ「わくわく応援隊」への登録をお願いします。登録いただいた方は応募作品に投票する権利が得られ、最多得票の作品に「わくわく賞」が贈呈されます（年間一口500円〜）。入隊希望の方は、こちらから（<https://wakuwaku-ouentai2024.peatix.com/>）登録をお願いいたします。

今後ますます、たくさんの方にインフラテクコンに関係していただけると、とてもうれしいです。